

# 八雲の再話という手法の今日性

## ・斬新性を説き明かそうとする

池田 雅之

牧野 陽子著

### 〈時〉をつなぐ言葉

ラフカディオ・ハーンの再話文学

そして牧野さんは、八雲の再話作品のもつ物語性に注目しつつ、次のように評しているものの、古代ギリシアの樹の精と人間の恋物語、話文学は、人々が語り継いできた素朴な物語世界に意味を見出し、そうした物語に新たな衣を着せて言語化する。さらに次の時代へと語り継いでゆくこと。また文学の本質であることを示すものなのである。八雲の『怪談』の「耳な

作品分析とはいえず、全体的には意匠の美しい文章で綴られており、深い洞察と直感的なひらめきを感じさせるフレーズが、あちこち

にちりばめられている。八雲その人を知りたいという

読者には少々迂回的に思われるかもしれないが、文学

研究としては作品論から入るのが、堅実な方法であり、

王道といえるであろう。

牧野さんの労作を読んで私が特に共感を抱いた点は

2つある。1つは八雲の再話文学の再評価への促しで

あり、2つめは、過去と現在を繋ぐものとしての物語

の8時間について考察である。一般に再話文学とは、

原典を語り直しただけのリサイクル文学にすぎないな

どと言われてきた。それ故に「第二芸術」とまで貶め

られてきた。

しかし、牧野さんによれば、「再話文学」とは、

従来の文学概念を覆すもの」であり、「著者の個性

を重視し、創作としての独自性と新しさこそが価値で

あるとみなす近代西欧の文学観とはまったく異なる作

品のあり方を示すものである。

八雲はこうして再話文学というさやかな物語の中

で「時」を刻みながら、民衆を超えた共感・感動の磁

場、根源的な共通感覚を伝えたいと願っていたのであ

る。「怪談」を始めとする作品群が、日本を描きなが

らも、日本を超えうる世界性を有しているのは、その

ためである。

九章から成る大部の本書の中でとりわけ感銘を受け

た章を挙げれば、第七章の「聖なる樹々」「青柳物語

」『十六楼』である。私に『怪談』の中で「青柳物語」という作品を最も好

んでいるせいもあるが、こゝで言えるにちがいない。

の柳の精をテーマにした作品こそ、東西の民族を超え

て、そんなことを考えさせられた。(いけた・まさゆ

き氏 早稲田大学教授・英文学専攻)

★まきの・ようじ氏は或城大学教授・比較文学シ

ン比較文化専攻。東大大学院博士課程修了。著書『ニ

ラフカディオ・ハーン 文化体験の果てに』『二

座小泉八雲(六編)』(1995)

一九五三(五)三三三

二〇一一年十一月廿四日

週刊 読書



牧野陽子

### 〈時〉をつなぐ言葉

ラフカディオ・ハーン

いふ物語を語り直すことの魅力と意味を解明

四六判・392頁・3990円 新曜社 978-4-7885-1252-8